<table>
<thead>
<tr>
<th>タイトル</th>
<th>人間生存条件の危機 その本質と構造</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>志岐 常正</td>
</tr>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>人間生存の危機 地球史の中で考える</td>
</tr>
<tr>
<td>期限</td>
<td>1984-03</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2433/87372">http://hdl.handle.net/2433/87372</a></td>
</tr>
<tr>
<td>Copyright</td>
<td>© 1984 法律文化社</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Book</td>
</tr>
<tr>
<td>Textversion</td>
<td>publisher</td>
</tr>
</tbody>
</table>

京都大学学術情報リポジトリ

KURENAI
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY
人間生存の危機
——地球史の中で考える——
渋谷寿夫・林 智・志岐常正 編

法律文化社
I
人間生存条件の危機
その本質と構造
危機感の浸透は二面性である

近頃、はてこれは？？と思ったことがある。というのは、ある会合で、一名ほどの農家の方がたと同席した。そのとき一人の人が「どうせ人類はそうじゃないのだから、何をして

もう行かない」という意味のことを発言したのに対し、「まさか人類全体が滅びてしまうことはあ

るまい」とか、「滅えないようにしなければいけない」といった別のお言葉が、一人も

なかったのである。

というわけか、その後、同様の発言に出合って、「滅びてよいのなら苦労はしません」と

いわなければならないことがしばしばある。これまで、多くの先見者や科学者が、地球上の人間文明や人類の生存自体が危機にさらされて

いることを憂い、警告してきただ。今やその危機にあるという認識自体、少なくとも日本では国

民の間に浸透し、国民的常識さえなっているように思われる。二〇年前に比べれば、まさに隔

世の感がある。

この二〇年の間に危機を克服しようとする運動も、原水爆禁止の運動をはじめとして、いろい

ろな曲折を経ながら続けられ、あるいは発展してきた。たとえば、先年の第二回国連締約総会へ

むけての運動は、かなり国民的な規模でとりくまれた。また、環境破壊による生存条件の危機に
人間生存在の危機——その本質と構造

対しても、ある日、その山や川を守る公害をなくす運動が、各地でおこなわれている。

だが、こういった運動が持続的に、ますます大きく発展し、危機克服の展望を具体的に誰の目にも見るようにするにいたっているかというと、残念ながらそうではない。そのことの何

実際のところ、日々の生活に追われている個々の人のうえとでは、人類全体の危機なんてとい

う問題は、大きくすすれば近いではなく感じられない。とくに、環境、資源・エネルギーなどといった問題

は、やや複雑な性格を持っているだけに、直接に生命・健康を損なわない限り、真剣に考えられ

ない。人類全体が発するのならば、たとえ昔の人々がしたように、７０歳を越えてから山に木

を植えているというような事態が発生するには、大変なことである。

人間、本来、生物の一種として、種族維持の本能をもっており、それにとどまらず社会を形成

している。こうなったからこそただ考えをすると、生きているということを考えた考えは、生

物としては異常であり、このような考えや風潮が拡がっているとすれば、それにとどまらず社会を構成するこの人間（人類）の存続の危機をなすといわなければならない。

つまり、この人間（あるいは人類）生存に関する危機論のなかで、これとは同様な、社会矛盾の深

まを人類の生存そのものの危機と取り扱いがえたむきがあることは実際であろう。このような取

り方が、それ自体危機の要素となりうることは、前節までのべたとおりである。
そこで、これまで、多くの科学者、特にマルクス主義の立場に立つ社会科学者は、このような世紀末論的悲観主義を批判してきた。その中でも、社会の変革により危機が生ずるような点についての批判がなされている。しかし、この批判は、ただ単に危機を否定するものではない。危機は、社会の変革を促すものであり、その変革を可能にするものである。この点で、危機の批判は、社会の変革を促すために必要なものである。

私の見解では、危機の存在は、必ずしも社会が停滞していることを意味するものではない。むしろ、危機は、社会が変革を必要とする信号である。したがって、危機の存在は、社会の変革を促すものである。したがって、危機の批判は、社会の変革を促すために必要なものである。
林氏のこの考え方には、もちろん正しい。このことを踏まえたうえで、筆者は、後者をさらに複雑に絡ませながら進行している。

二つに分けて考えてもよい。それによって、前節で触れた危機の原因の階層性の問題は、危機の本質的深刻さとの関係が、把握しやすくなろうと考えるからである。二つのうち一つは、現在の社会システム、とくに資本主義体制の本性に由来し、時間的にも長らくオーダーのものであり、他の一つは人間社会の本質に根ざす、より根本的、その克服にはおそらく1000年のオーダーの努力を要するものである。

まず、前者についてのべてみよう。

林氏も指摘されているとおり、「資本主義」という社会経済体制は、「利便社会」。効率化社会を作りあげる銀行（開発）。利潤動機の自由な展開にゆだねる体制である。効率化追求の暴走に対して歯止めがかからない。それは、資本主義社会といえるものであり、基本的には、労働を生産の唯一の動機とする社会であり、自由な競争を前提とした社会であるから、不利益である。

このような体制は、資本主義世界の暴走につながって、そのわだちを忠実にふみつつあるように見える。

このようにして、全地球的に、資源・エネルギーの消費が加速的に増大し、それにともなって地球の汚染、環境の破壊、食糧問題、などが進行している。そうして、この事態を最も正確に
10

「必将したいるのは、おそらく最も多くの情報を持っている勢力、すなわち国際資本主義体制の
支配層である。彼が自己を国際社会を動かし、また矛盾をくぐり出している職人であるから、

もちろん。

（2）より本質的矛盾

問題を簡便にするために、世界的な政治、経済のシステムが変わり、全人類が社会主義体制にな
った場合を考えてもよい。先進資本主義国というものが世界に存在しなかったならば、社会主義
国がこれに引きずられることも少なくなり、公害も環境破壊も起こらないだろう。

生活の向上（利便化の求める、より多くの生活向上を必要としそそれを求める。）というのであ
ら、電気も水道もない江戸時代の生活に戻れといわれれば閉ざされること是不可能に近い。

先にも触れてもおり、社会主義体制が利便化、効率化の内容をもったものをとして、ほとんど世界中の人類をとら
えてしまう。例外的には古代の復活を唱え、みずから実践する人がいたとしても、（それ
が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や
向上を必要とし、それを求めて苦闘していた人々がいた。そうして今では、より豊かな生活へ

が良いというものではない。）世界中の人類をとその意見に同意させる。過去の歴史において、必ずどこかに生活の安定や

「人間生存条件の危機——その本質と構造」について、
連続性が欠けており、やがて核融合エネルギーの利用が実現されるだろう。
さらに未来には、すべての元素を工業的に
生産するべきである。
人間生存条件の危機——その本質と構造
二つの危機 そのまとめと補足

（3）二つの危機 そのまとめと補足

以上に述べたところを図にまとめると、図1-1のようになると考えられる。前出の林氏の理解で図1-1にまとめている。表1において、核Ｗ等と記されているのは、危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題などを含めることができ、このような理解で図1-1は、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができることを含めることができ、このような理解で図1-1は、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかということや、核含む前の項目の問題を含めることができる。危機の性格を対応するかうこと
I 人間生存条件の危機—その本質と構造

表Ⅰ-1 人間生存の危機の構造（林智氏による）

<table>
<thead>
<tr>
<th>人間生存の危機（暴走のつけによる、人類とその文明の破壊の危機）</th>
<th>「急性的危機」大量殺人・破壊の技術の効率化による破壊</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>「慢性の危機」効率追求の暴走に由来する人間・環境系の相互関連</td>
<td>警戒の先哲</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資本主義社会を先頭とする、世界的な「危機の大拡大競走」

（資本主義体制の本性、現実の社会主義社会）

科学者の社会的責任

大前提：人智をつくって、この異なる時代を切り抜けること

責任１：知らせる→社会的力に
責任２：学問・技術を正しい姿勢で高める→危機を認識して行動

（教示されるべきは人間）

図Ⅰ-1 人間生存の危機の構造

人間生存の危機——

核（等）戦争の危機——急性（今日起きても不思議でない）

人間生存条件の危機——100～200年？（すでに始まっている）

生活向上の要求、自然の人工化、現在の経済的価値基準

「短時間の最適条件」の追求

現在の社会システムによるもの、効率化的暴走（階級性をもつ）

地球の有限性、長期的最適条件の追求

価値基準の転換、社会の総合的研究

科学によって理解される社会

* 最も根本的に、解決困難
これまたむしろ有害であろう。それは、筆者が述べたような問題の根本的解決に、眼をふさぐことになりかねないだけでなく、科学と科学者の責任をあいまいにし、科学者の責務性は、科学論・技術論の研究者、あるいは、現代先端技術の開発にたずさわっておられる科学技術者の根本的な教示や意見を期待している。

(1) とうえは、「アメリカ合衆国政府・西暦二〇〇〇年の地球」、連盟三立花、佐賀訳（家芸協会）
(2) 林智前出。
(3) 大沢八郎「文明の進化：日本の科学者・三巻号：一九七八年・五号二ページ」

四、何をすべきか——結論にかえて

事態を明らかになれば、なすべきことは、かなりはっきりとしてくるはずである。しかし、今の場合、危機の構造の細部ははっきりしない。それは、新しい状況下で、手をこまめにしているわけではない。なお、指摘したとおりである。それが明らかになるまで手をこまめにしているわけではない。

(1) こちら、計算、予測の努力はおこなわれている。しかし、それらは、すべて何の役に立つのか、生活にどう影響するのか、人間の未来まで含めて、何と著陸するのか、どんな状況下で、どの先端研究の研究者に、何の方法で、何をどうするか、何がどうするのか、何がどう考えるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えられるのか、何がどう考えて
核兵器の開発の例を挙げることなく、明らかである。このことから、科学はたして人間に幸いをもたらすものか、不幸をもたらすものかという議論が世間でしばしばおこなわれる。なかには、
すべての災厄は科学から生まれることも、いかにしてむしろかではない。しかし、科学の発展によって生まれた矛盾を克服し、危機を解決する途を見出すものであり、科学的研究の他にはありえない。
この研究が実践的なものでなければならず、科学はしたがって、基礎科学の
発展の重要性、人科学、社会科学、自然科学の全ての発展の必要性を、
課題の深さ、難しさを考えたとき、おそらく明らかである。ここでは、
筆者に於て、人間生存の危機が、現在の社会科学に由来するだけでなく、
もっと深い人間文化の本性に由来する面があることを強調したい。しかし、それは、現在の社会科学を維持
しようという主張を意味しない。
その反対に、筆者は、現在の社会科学を解し、科学による制御が可能かつ容易な社会シス
テムに全世界を改めることが、当面の課題であると考える。危機が根深であり、大きく、また
生活を続けるためには、それに固有の法則にしたがい、みずから自律しなければならない。少なく
空を飛ぶには流体力学の法則にしたがわねばならないように、人間が、宇宙船地球号。上で生
すことが。
社会のシステムの変革されは否否であれば、それは政治の問題である。しかし、政治家にとって、日々基本的に
さされなければならないことは、国民の生活を守り、向上させることである。どんなに誠実で視
野の広い政治家であろうと、一国の政治に責任を負う立場にある限り、自国の当面の利益を犠
牲にして人類の長期の最適条件を追求するという政策はとりにくい。
短期的・局地的な最適条件の追求と、時空的にグローバルな最適条件の追求の間の矛盾を解決する具
体のプログラムを、広範な国民とともに、また国民とともに実行的につく出し、政治に対し提起する責任は科学者にある。そして、この際の自由社会のための条件の構造である。自由の歴史と科学の実践としての政治にも誤りは避けられないからである。科学的実践は科学的自由であるというのにおいては、特別の保証ではないだろうか。

このように考えたときに、いかなる社会においても科学の実行としての政治にも誤りは避けられないからである。科学的研究の成果にまったく誤りがないということはありえない。そして、この状況を転換することなくして、科学者は、人間社会の危機の克服に、その重要な責任を果たすことが出来ない。同時に、科学的研究の成果に、科学の実践としての政治にも誤りは避けられないからである。科学的実践は科学的自由であるというのにおいては、特別の保証ではないだろうか。

この状況を転換することなくして、科学者は、人間社会の危機の克服に、その重要な責任を果たすことが出来ない。同時に、科学的研究の成果に、科学の実践としての政治にも誤りは避けられないからである。科学的実践は科学的自由であるというのにおいては、特別の保証ではないだろうか。

この状況を転換することなくして、科学者は、人間社会の危機の克服に、その重要な責任を果たすことが出来ない。同時に、科学的研究の成果に、科学の実践としての政治にも誤りは避けられないからである。科学的実践は科学的自由であるというのにおいては、特別の保証ではないだろうか。

この状況を転換することなくして、科学者は、人間社会の危機の克服に、その重要な責任を果たすことが出来ない。同時に、科学的研究の成果に、科学の実践としての政治にも誤りは避けられないからである。科学的実践は科学的自由であるというのにおいては、特別の保証がない。
執筆者紹介（50音順 ★著者・編集責任者）
①生年  ②所属  ③専攻  ④主要著書（共著）

泉 邦彦（いずみ くにお）  ①1934年  ②京都工芸繊維大学助教授  ③生化学  ④「総合有機化学＝有機物質と生命の化学」（培風館、1976年）、「化学のことば」（講談社、1983年）

片野 学（かたの まなぶ）  ①1948年  ②九州産業大学講師  ③果樹園芸学、自然農法論  ④石川武男編「冷害」（家の光協会、共著、1982年）

木村 春彦（きむら はるひこ）  ①1919年  ②京都教育大学名誉教授  ③国際問題研究会理事長、災害問題研究所長  ④環境地学  ⑤「地学自然地理学」（講談社新社、1965年）、「現代の災害」（水曜社、1982年、共著）、「木村春彦論文集」（1980年）

志岐 常正（しげ つねまさ）  ①1929年  ②東京大学大学院教員  ③地質学、海洋地質学  ④「岩石」（新地学教育講座第4巻）（東京大学出版会、1976年、共著）、「堆積物の研究法＝礫岩・砂岩・泥岩」（地学団体研究会、1983、編著）

渋谷 寿夫（しぶや かずお）  ①1913年  ②大阪経済大学教授  ③生態学、環境論  ④「生態学の諸問題」（1956年）、「理論生態学」（1960年）以上理論書、「自然と人間」（法律文化社、1978年）

藤原 健夫（ふじわら けんご）  ①1928年  ②名古屋大学大学院教授  ③生化学、地質学  ④「常見岩石光学図表」（岩波、1977年、共著）、「世界の地質」、「岩波講座・地球科学16巻」（岩波、1979年、共著）、「偏光顕微鏡と岩石鉱物」（共立出版、1983年、共著）

木村 実（きむら みのる）  ①1927年  ②大阪医科大学教授  ③放射化学、放射線管理、人間環境論  ④「放射化学・放射線化学」（調理産業研究会、1982年）、「環境アセスメント研究ノート」（武蔵野書房、1979年）

山口 正之（やまぐち まさゆき）  ①1918年  ②大阪経済大学教授  ③経済課題・経済学史  ④「マルクス主義と産業社会論」（新日本出版社、1969年）「危機の時代の経済学」（新日本出版社、1983年）「社会革新と管理労働」（丸善、1975年）

＜検印省略＞
定価1700円

1984年3月20日 初版第1刷発行

人間生存の危機

編者  渋谷 寿夫

志岐 常正

発行者  柴田 穰

発行所  株式会社 法律文化社

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71
振替名: 京都2-10617 電話075-791-7131

日本写真印刷株式会社・池田製本所

©1984 Kazuo Shibuya, Satori Hayashi, Tsunemasa Shiki
ISBN4-589-01124-7